



Data	
監督・脚本	犬童一心
原作	松本清張
出演	広末涼子 / 中谷美紀 / 木村多江 / 西島秀俊 / 鹿賀丈史 / 杉本哲太 / 崎本大海 / 野間口徹 / 黒田福美 / 本田博太郎 / 市毛良枝

みどころ

『椿三十郎』(07年)や『私は貝になりたい』(08年)に続いて、東宝が松本清張の名作のリメイクに挑戦！金沢の雪、能登の荒海、あの断崖、そして昭和32年の風景を、犬童一心監督はどのように演出？人間ドラマでは、野村芳太郎版(1961年)以上に広末涼子、中谷美紀、木村多江の3大女優比べの妙に注目！他方、存在感をみせる男優は誰？山崎豊子原作の『沈まぬ太陽』(09年)と共に大ヒットを期待したいが、さて？

■次々とリメイク！あの名作も！■

東宝は、森田芳光監督が『椿三十郎』(07年)に、福澤克雄監督が『私は貝になりたい』(08年)に、樋口真嗣監督が『隠し砦の三悪人 THE LAST PRINCESS』(08年)に挑戦して過去の名作のリメイクに力を入れているが、そんな流れが松本清張原作、野村芳太郎監督の名作『ゼロの焦点』(61年)にも。

私は2005年12月24日から2006年1月13日までの間シネ・ヌーヴォで開催された『追悼 映画監督・野村芳太郎』で計11本の野村芳太郎監督作品を(再)鑑賞したが、その中の1本が『ゼロの焦点』。私にとっては『点と線』と『ゼロの焦点』の2つが松本清張初期の代表作。『ゼロの焦点』には久我美子、高千穂ひづる、有馬稲子という(昔の)三大女優が登場している点が興味深かったし、3人のバトルが見モノだった。そして、当然私の採点も星5つ(『シネマルーム10』19頁参照)。

今回私が注目したのは、第1にリメイクに挑んだのが犬童一心監督だということ。第2に主役が広末涼子だということだ。私には犬童一心監督は大監督というより問題提起型監

督というイメージが強い。また広末涼子は『おくりびと』（08年）がアカデミー賞外国語映画賞を受賞したことによってがぜん注目されたものの、日本のトップ女優というイメージはなく、格からいえば中谷美紀の方が上？さあ、そんな組み合わせで野村芳太郎監督の傑作のリメイクは大丈夫？そんな心配もあったが、その出来ばえは？

■平成21年VS昭和32年■

昭和36（1961）年の野村芳太郎監督作品と平成21（2009）年の本作との時間差は48年。また本作の主要な舞台となる昭和32（1957）年と本作製作時の平成21（2009）年との時間差は52年もある。10年ひと昔という感覚でいえば、はるか昔のことだから、本作をリメイクする上で何よりも大変なのは、スクリーン上に昭和32年当時の雰囲気を盛り込むこと。本作の冒頭、昭和18（1943）年10月21日、明治神宮外苑競技場で挙行された出陣学徒壮行会のシーンが登場したのはビックリしたが、これは一体なぜ？

野村芳太郎監督の『張込み』（58年）は、東京から九州の佐賀まで「張込み」のために夜行列車で長旅する二人の刑事の姿が印象的だったが、『ゼロの焦点』でも、結婚したばかりの鶴原禎子（広末涼子）が金沢へ出張する憲一（西島秀俊）を東京駅で見送るシーンが本作前半のハイライト（？）。さて、このシーンは一体どこでどんな風に撮影？また、今なら別れ際に手渡すものはビールや弁当などかなりマシなものはずだが、本作において禎子から憲一に手渡されたのは明治バターキャラメル箱1つ。あの当時日本はまだ貧しかったのだと実感させられるワンシーンだが、実はこの小道具が後に大きく効いてくることに・・・。

車や電話等々、昭和32年を舞台とした作品を平成21年の今印象強く蘇らせるについては、大変な苦勞があったはずだ。まずは、犬童一心監督のそんな苦勞に思いを・・・。

■雪と波、金沢と能登、そしてあの断崖■

『ゼロの焦点』は犯人捜しの妙を軸とした傑作推理小説であると同時に、戦後の日本を舞台とした人間の性（さが）をリアルに描いた社会派色の強いもの。そして複雑に絡みあう人間ドラマを演出する本作の舞台となるのは、雪の金沢、日本海の荒波の能登、そして自殺の名所となる有名なあの断崖だ。野村芳太郎監督作品は91分とコンパクトだったが、その舞台の描写は実にお見事だった。それに対して犬童一心監督作品は？

それはあなた自身が観てのお楽しみだが、プレスシートにおける撮影の薦井孝洋氏の「ロケハンの移動距離と掛けた日数は今まで担当した作品のなかで一番だったと思います」との言葉を見れば、その出来が想像できるというものだ。自殺を偽装するため断崖の上に遺書と靴を置いておくという設定はTVの2時間ドラマでも多用されているが、それを大スクリーンで説得力をもって見せるには、それなりの時間とカネをかけた演出が必要なこと

は当然。そんな本作の見どころはあなた自身の目でじっくりと。

■□■女優比べの妙が強調！■□■

今ドキ「パンパン」という言葉を知っている若者はまずいないはず。また、「立川」という地名を聞いてアメリカ軍の基地があったところと連想する人もまずいないだろう。したがって本作を理解するためには、そんな昭和32年当時の「常識」を知っておく必要があるが、事前にそれが必要かどうかは微妙。本来映画は何の予備知識もないまま観て堪能し感動できるものを目指すべきだが、そのためやたら解説調になるのはナンセンス。そうかといって観客がストーリーの意味がサッパリわからなければそれもダメだから、そのバランスが難しい。本作のような推理モノになれば、そのバランスはさらに大変だ。

昭和32年の今は金沢で室田耐火煉瓦株式会社の社長室田儀作（鹿賀丈史）の社長夫人に収まっている室田佐知子（中谷美紀）と憲一の隠し妻（？）として能登で生活していた田沼久子（木村多江）は戦後すぐ、どこで、どんな生活をしていたの？そして、その頃戦争から復員してきたばかりの憲一は？そんな、戦後すぐの混乱期において発生した偶然の人間関係が、あの殺人事件、この殺人事件を生むわけだから話はややこしい。しかし、そこに人間の本性が見えてくるから面白いわけだ。

ある意味で『ゼロの焦点』は急遽素人探偵となった女性が夫殺しの犯人捜しに挑む作品だが、そんな新妻禎子に扮した広末涼子はいかなる演技を？また、3人の中で最も複雑なキャラを演じ分けなければならない中谷美紀は大変だが、それは『嫌われ松子の一生』（06年）であれほど移り変わる松子を演じた中谷美紀ならオーケー？日本初の女性市長候補上条保子（黒田福美）の当選が決まった後の佐知子の挨拶は、当初こそ静かだったが次第に熱を帯びてきた。そんな彼女のエネルギーは一体どこに？他方、ワンポイントながら名演技を見せるのが、「手の荒れた女」「妙に英語のうまい女」田沼久子を演ずる木村多江。平成21年の今はこんな女は存在しないはずだから、久子役を演ずるのは難しかったはずだが、さすが演技派の木村多江！

本作は3人の衣装を含め、野村芳太郎監督作品以上に3人の女優比べの妙が強調されているから、それに注目！

■□■鹿賀丈史の存在感はさすが！■□■

女優3人の「張り合い」に比べると、本作ではもともと男の存在感は薄い。一見主人公と思われる憲一は東京駅での禎子との別れが最後の姿となるため、以降回顧場面ではしか登場しなくなるから主役ではない。また、「憲一は自殺なんかする男じゃない」と妙な自信をみせながら金沢に乗り込み、独自の調査を始めた憲一の兄鶴原宗太郎（杉本哲太）も、憲一の後継者として東洋第一広告金沢営業所に勤務しながら禎子に調査協力することによって重大なヒントを掴む本多良雄（野間口徹）もあっさり（？）殺されてしまうから、彼ら

も準主役にはなり得ない。もちろん、憲一の上司青木（本田博太郎）や佐知子の弟でかけだしの画家として室田家のお世話になっている鳴海亨（崎本大海）もそうだ。

そんな風に本作の男優陣は全体的に存在感が薄い、ただ一人強い存在感を見せるのが鹿賀丈史。社長として従業員たちに強面の顔をみせたり、美しい妻佐知子と憲一の関係に嫉妬したり、選挙運動に情熱を燃やす佐知子を一見認めながら内心ではバカにしたり、そのキャラは複雑だが、かなり魅力的。松本清張の傑作推理小説らしく物語は思わぬ展開をみせ、最後にはあっと驚く結末が待ち受けているが、さて室田儀作はそこでどんな存在感を？いつもながらちょっとクセのある（？）鹿賀丈史の重厚な演技に注目だ。

■□■ケータイ小説より太宰治、山崎豊子、松本清張を！■□■

東宝は山崎豊子の大作『沈まぬ太陽』を3時間22分の大作として制作し10月24日から公開するが、東宝のそんなチャレンジに拍手。また、東宝製作にかかる根岸吉太郎監督の太宰治『ヴィヨンの妻』（09年）が第33回モントリオール世界映画祭で最優秀監督賞を受賞したことに拍手。さらに、本作のような松本清張の傑作のリメイクへ東宝が挑戦したことに拍手！

他方、東宝は『ROOKIES - 卒業 - 』（09年）や『ごくせん THE MOVIE』（09年）などTV局と組んだ若者向けの作品を大量に作りヒットさせているが、私はこれには拒否反応が強い。また新垣結衣主演の『恋空』（07年）の大ヒット以降、『Dear Friends ディア フレンズ』（07年）や『天使の恋』（09年）など近時はケータイ小説がたくさん映画化されているが、私はこれにも拒否反応がある。若者文化を全面否定するつもりはないが、私としては安易なケータイ小説ではなく、太宰治の短編を読んで何かを感じたり、山崎豊子、松本清張の大作をしっかり読んでさまざまな問題意識を持ってもらいたいと思っているわけだ。

そんな意味でも、松本清張の最高傑作の1つ『ゼロの焦点』が平成21年の今、犬童一心監督の演出、広末涼子主演によって若者にも受け入れられることを大いに期待したい。

2009（平成21）年10月16日記



104

「ゼロの焦点」

(14日からTOHOシネマズ梅田ほかで公開)



©2009「ゼロの焦点」製作委員会

若者必見！これぞミステリーの最高峰！

若者には「沈まぬ太陽」「不毛地帯」の山崎豊子以上に、「砂の器」「黒革の手帖」の松本清張が有名。推理小説の華は犯人捜しだが、舞台設定の妙と社会的問題提起の鋭さが清張文学の真骨頂だ。

平和とツボンの若者に昭和30年代の米軍基地のありよう、パンパンという言葉の意味が分かる？能登金剛のヤセの断崖ってどこにあるか知って

る？「点と線」と並ぶ推理小説の最高峰を堪能するにはそんな探究心が不可欠だ。

赴任先の金沢へ転勤のための片付けに出掛けた新婚ホヤホヤの天鶴原憲一（西島秀俊）が消息を絶ったのはなぜ？その生死は？そこから始まる新妻種子（広末涼子）による探偵ドラマの展開とあっと驚く結末は、何度観ても新鮮だ。

広末の抜擢はメアカで

ミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」(08年)での熱演のご褒美？私は中谷美紀演ずる過去を封印した社長夫人室田佐知子のおの時代なればこそその強い生き方に注目。

他方、日陰の女ながら小さな幸せを夢見る木村多江演ずる田沼久子は、出番こそ少ないが圧倒的な存在感を見せる。もともと同じ境遇の女なのに、その後の生き方はな

ぜこんな両極端に？

復員後一時警察官をしていたという憲一は、そんな女たちといつ、どこで知り合ったの？そしてその中で彼の価値観はいかなる変化を？憲一と妻佐知子との関係を邪推する新興企業社長室田儀作（鹿賀丈史）や、探偵気取りの憲一の兄室太郎（杉本哲太）らの行き着く先は？

1961年の野村芳太郎監督作品に挑戦した大室一心監督は、種子・久我美子、佐知子・高千穂

ひづる、久子・有馬稲子だった配役に、旬の3女優を配し、女のバトル劇をより重視した。

冬の金沢兼六園の雪模様は絶景だが、北陸の雪景色と日本海の荒波そして自殺の名所の断崖という舞台は、戦争直後の生々しい人間ドラマの展開と絶妙にマッチ。平和な時代と穏やかなあなたの周囲に感謝しながら、こんな最高のミステリーを

楽しもう。

大阪日日新聞 2009(平成21)年11月7日